No. 134

ティーブレイク

Tea Break

ゾウの背中

ゾウというのは本来，自分の寿命を悟ると，皆に気付かれないように静かに群れを離れて，ゾウの墓場に向かうものであるという。そして，「象の背中」という映画では，ガンで余命が半年と宣告された主人公が，最初はそのように企図をする。けれども，結局はゾウのようになることができず，家族に囲まれながら，この世を去っていく。

ところで，千葉県の市原市に「ゾウの国」というものがある。“星になった少年”と関係する場所であるとも聞いている。ここは，同じく千葉県市原市にある「東京ドイツ村」を紹介した知人から，「近くにあるから行ってみるとよい」ということで勧められて知った場所である。

このような経緯であるから，ドイツ村にて昼食をとった後に，ナビに入れて出発をした。するとナビは，道路の案内標識板で「茂原」を指す方向にばかり，案内をしていく。千葉県茂原市は，自分の生まれ故郷であり，その近くにゾウが居たことなど，聞いたことがない。でもナビは，確実に，なぜか自分の生まれ故郷である「茂原」を指し示す方向にばかり案内をしていく。

そうして，何回「茂原」を指し示す角を曲がっただろうか。そんなことを考えていると，牛久あたりから，茂原とは違う方向に曲がるようになった。

「こんなところにあったのか…」。これが，私のそこに着いた最初の感慨であった。それは母が最期を迎えた千葉県立鶴舞病院の目と鼻の先にあった。

よくよく考えてみれば，母が亡くなった後は，全く行かなくなった場所である。ある意味では無意識的に避けていたのかもしれない。地図ですら，見ないようにしていた感がある。

帰りには，どうせ近くだからということで実家に立ち寄ってみることにした。ナビに実家の住所を入れて走り始める。

「この道は…」。そう，病院と実家を結ぶ道である。母が死ぬ以前は，それこそ何度も通った道である。夏には全身汗まみれになって，冬には悴む手をさすりながらペダルをこいだ。雨の日には，20キロ以上も自転車で行くと，病院に着く頃には合羽を着ていないのと大して変わらない。もう何度も何度も通った道である。「もうナビの案内は必要ない…」，そのスイッチを切りながら，なぜかその文字がかすむ。

最後は，母の遺体を運んだ。ところでこの道の記憶は全て終了している。

そんな私の傍らで，子供達は大はしゃぎである。ゾウの背中に乗ったのが初めてであったし，こんな田舎道も珍しいのであろう。この子達は，おばあさんの顔すら知らない。第一，幼児というのは基本的には寿命とか墓場とかに無縁の存在である。そんな中で車は走る。

ここの風景は，以前と殆ど変わらない。母がこの世に居ないことを除けば。けれども，子供達を乗せた老ゾウと，母の姿がなぜか重なる。

母は，最後の入院をする際に，果たして自分の最期を悟っていたのかどうか，それはわからない。けれども，「お前は独立したんだから，しっかりしなさい。見舞いになど来る必要はない」と頑強に言っていた母でも，その禁を侵して行った私に会って，実に嬉しそうであった。

どうやら，あれほど勝気だった母も，ゾウにはなれなかったようである。だが，一体誰がそのようになれるのであろうか。少なくとも自分には，なれそうにもない。

（正）